

白山3遺跡

— 香川厚生年金健康福祉センター建設用地造成
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2001年3月

三木町教育委員会

はじめに

郷土に残されている文化財は、歴史や文化を理解する上で、欠くことのできない貴重な歴史的遺産であります。これらの文化財に適切な保存・活用を図り、文化的向上に資することが我々の責務と考えます。

このたび、香川厚生年金健康福祉センターの用地造成に伴い、香川県教育委員会文化行政課の指導のもと発掘調査が実施されました。当遺跡は昭和54年度の調査により、弥生時代中期末の竪穴住居跡及び箱式石棺が検出された丘陵を含んでおり、今回の調査では、さらに集落域の拡がりを確認することができました。

本報告書が、本町の地域史解明の資料として、広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に際し、ご指導・ご協力をいただきました関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成13年3月

三木町教育委員会
教育長 小川和夫

例　　言

1. 本報告書は、三木町教育委員会が香川厚生年金健康福祉センター用地造成事業に伴い、発掘調査を実施した、白山3遺跡（しらやま3いせき）の調査報告を収録したものである。
2. 発掘調査の実施及び本書の執筆、編集は三木町教育委員会主任主事 石井健一が担当した。
3. 調査にあたっては、次の関係機関から協力を得た。記して謝意を表したい。
(順不同・敬称略)
讃岐香川県埋蔵文化財調査センター、香川県教育委員会文化行政課、㈲同栄社設計事務所、
三木町土地開発公社、谷井建設㈱
4. 実測及び整理作業にあたっては、下記の方々の御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。
(順不同)
岡本健司、森下英治、山本英之、山元敏裕、西岡達哉、萬木一郎、大嶋和則、多田（松尾）歩、
青木早百合、森澤潮美
5. 発掘調査は下記の方々の協力を得て実施した。(順不同)
石浜シナエ、石原サヨ子、大西ミツノ、岡田藤子、川波キヨ子、櫛田英子、久保安雄、黒川巖、
高木ミサオ、高橋キヨ子、森山京子
6. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔を表す。挿図の一部に建設省国土地理院発行の25,000分の1の地理図「志度」を使用した。
7. 出土遺物及び図面は三木町教育委員会に保管している。

目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 立地と環境.....	3
第3章 調査結果の概要.....	6
(1) 調査区の概要.....	6
(2) 各遺構の概要.....	9
① S H01 (S区)	9
② S H02 (S区)	10
③ S H03 (S区)	11
④ S H04 (S区)	11
⑤ S H05 (N区)	12
⑥ S H06 (N区)	13
⑦ S H07 (N区)	16
⑧ S T01 (S区)	16
⑨ S T02 (S区)	18
⑩ S T03 (S区)	18
⑪ S T04 (S区)	18
⑫ S T05 (S区)	18
⑬ S T06 (S区)	18
⑭ S K01 (N区)	20
⑮ S K02 (N区)	21
⑯ S K03 (N区)	21
⑰ S K04 (N区)	21
⑱ S K05 (S区)	21
第4章 ま と め.....	23

挿図目次

第1図	遺物実測図	1
第2図	調査区位置図	2
第3図	周辺の遺跡位置図	4
第4図	N区北壁土層断面図	6
第5図	調査区遺構配置図	7 ~ 8
第6図	S H01平・断面図及びS H01出土遺物実測図	9
第7図	S H02平・断面図及びS H02出土遺物実測図	10
第8図	S H03、04平・断面図	11
第9図	S H03、04下方のS区包含層出土遺物実測図	12
第10図	S H05平・断面図	13
第11図	S H05出土遺物実測図	14
第12図	S H06平・断面図及びS H06出土遺物実測図	15
第13図	S H07平・断面図	16
第14図	S T01平・断面図	17
第15図	S H01、S T01、02、03、04、05、06平面図及びS T02、03、04断面図	19
第16図	S T05平・断面図	20
第17図	S K02出土遺物実測図	21
第18図	S K01、02、03、04平・断面図	22

写真目次

写真1	N区全景	写真16	S H05、07完掘状況（南西から）
写真2	白山3遺跡遠景（西方の天神山から）	写真17	S H05内遺物出土状況
写真3	N区調査前状況（南西から）	写真18	S H06完掘状況（北から）
写真4	S区調査前状況（西から）	写真19	S H07完掘状況（北から）
写真5	N区調査前状況（南から）	写真20	土壤墓群（西から）
写真6	S区完掘状況（北西から）	写真21	土壤墓群（東から）
写真7	S区完掘状況（北から）	写真22	S T01遺物出土状況（東から）
写真8	S H01完掘状況（東から）	写真23	S T01完掘状況（東から）
写真9	S H02遺物出土状況（北東から）	写真24	S T04完掘状況、S T05塊石群検出状況（南東から）
写真10	S H02完掘状況（北西から）	写真25	S T05右検出状況（北東から）
写真11	S H02完掘状況（南西から）	写真26	S K01~04検出状況（西から）
写真12	S H03検出状況（北東から）	写真27	S K01、02、04埋土の状況（南から）
写真13	S H03、04、S K05完掘状況（西から）	写真28	S K01完掘状況（南西から）
写真14	N区完掘状況（南から）	写真29	S K02遺物出土状況（西から）
写真15	S H05完掘状況（西から）		

第1章 調査に至る経過

三木町では、「生活と健康を守る福祉の町」づくりを実現するため、宿泊・文化・スポーツ・レクリエーションなど、多目的な国の総合保養施設である厚生年金健康福祉施設の誘致を当町下高岡地区において計画した。三木町土地開発公社は三木町からの委託を受け、その用地について一括購入し、更地後に園に売渡すこととなった。

平成5年5月28日、三木町土地開発公社から用地造成工事の事業計画に伴う事業予定地内について埋蔵文化財の所在及びその取扱いについての照会があった。同事業予定地内は昭和54年度調査の白山3遺跡が所在する尾根丘陵上に位置することから、さらに包蔵地が展開していることが予測された。

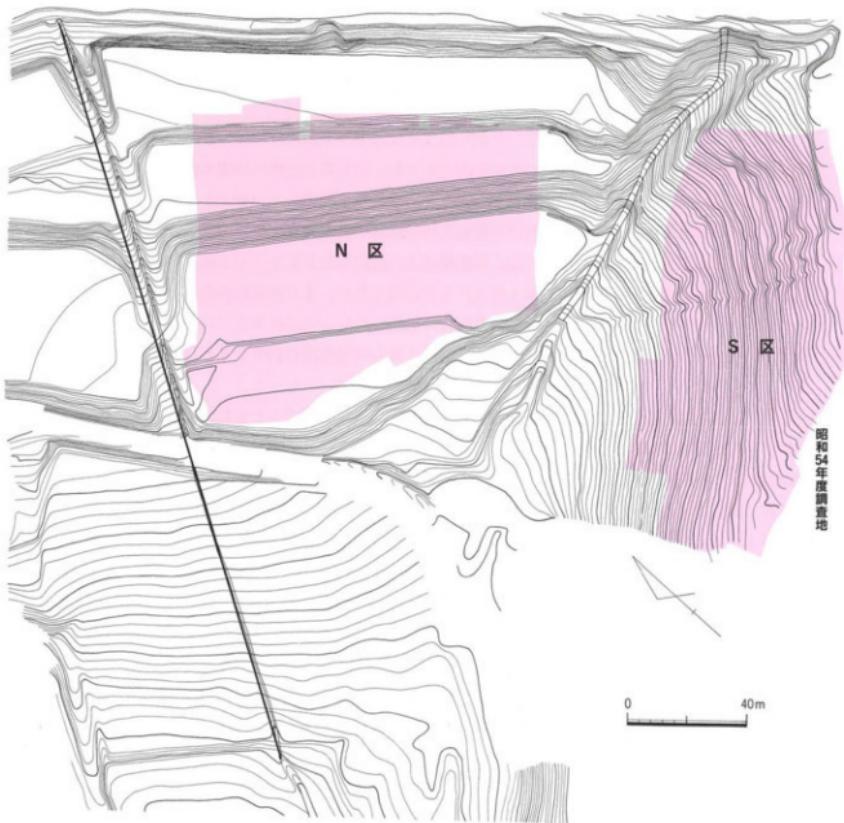
そこで当町教育委員会は、香川県教育委員会文化行政課に試掘調査を依頼することになった。平成5年9月13、14日に実施した試掘調査では、尾根稜線上に設定したトレンチで上坑や堅穴状遺構などの遺構とともに、弥生土器や須恵器壺（第1図1）などが出土した。また同尾根の急傾斜面に設定したトレンチでは堅穴住居を検出した。平成5年11月30日に実施した第2次試掘調査では弥生期の遺構、遺物は検出されなかったが、中世土器包含層を確認した。これらの試掘調査結果をもとに保護措置を図る必要があるとの判断を受け、平成6年度から事前調査を実施する運びとなった。

このため当町教育委員会は、県教育委員会文化行政課の指導を仰ぐこととし、平成6年4月12日から同年7月17日までの期間で発掘調査を実施した。調査対象地が広大であったため、白山からの南尾根部（約3,000m²）をS区、北尾根部（約5,000m²）をN区に設定した。

なお、調査中に白山最高所（白山2遺跡）周辺を踏査し、石礫（第1図2）を採集した。採集地点は最高所より30m程下った登山道脇であり、白山2遺跡に関係するものと考えられる。



第1図 遺物実測図



第2図 調査区位置図

第2章 立地と環境

三木町は香川県の東部に位置し、北は木田郡牟礼町と大川郡志度町、西は高松市、東は大川郡長尾町、南は香川郡塩江町と徳島県美馬郡脇町に接し、東西5.8km、南北18.4kmで南北に細長い形をしている。町の南北には山地を有し、北部には立石山（標高272.5m）、小野ヶ原山（標高252.0m）など標高200～300mの山塊が連なり、立石山地を形成している。南部には当町最高峰の大相山（標高881.1m）や高仙山（標高627.1m）をはじめとして標高500～600mの山頂が連なり阿讃山地を形成している。また、当町中央部は平坦な低地になっており、南方の阿讃山地に源流をもつ新川水系の諸河川と長尾町との町境を流れる鶴部川に沿って沖積平野が広がっている。その中で白山（標高203m）は志度湾を望む立石山地の南端に位置する一独立山塊を形成している。

白山3遺跡は白山南麓より南西方向に派生する丘陵頂部と急傾斜面部、谷筋を含む緩傾斜面部に所在する。当遺跡は昭和53年秋から冬にかけての土地造成中に確認された集落遺跡で、当町教育委員会が香川県教育委員会文化行政課の指導を得て、昭和54年7月に調査を実施している。調査の結果、堅穴住居1棟と箱式石棺3基を検出しており、弥生時代中期末に位置づけられている。また、白山一帯は古くから開けたところでもあり、明治5年には白山南西麓の現在、香川県畜産試験場（白山1遺跡）で「六区製糸撚文銅鐸」が出土している（辰馬考古資料館蔵）。また、出土地は明らかではないが、白山付近から磨製石剣が出土している（鎌田共済会郷土博物館蔵）。

近年、町内では大規模開発に伴い発掘調査が急増しており、地域の歴史解明につながる良好な資料が得られている。旧石器時代については香川県教育委員会の試掘調査で七ツ塚4号墳の周溝部からサスカイト製翼状剥片を検出している。また、池戸八幡神社内小丘陵南裾部でサスカイト製ナイフ形石器を表探している。

縄文時代については南天枝遺跡より町内初の晩期土器を検出している。高松市小山・南谷遺跡では晩期の落し穴状土坑が確認されており、同様の遺構が尾端遺跡、西浦谷遺跡で見つかっており、今後さらに発見される可能性がある。

弥生時代に入ると、古川河川改修工事の際に鹿伏東古川堤防より前期の遠賀川式土器が見つかっている。香川大学農学部では前期後半の土器包含層が確認されており、集落域が広範囲に広がっていることを示唆している。また、農学部遺跡の南東に位置する福万遺跡でも前期末の土器片が出土している。中期中葉になると鹿伏・中所遺跡において集落が確認されており、中期末になると白山2遺跡、西浦谷遺跡、高松市久米池南遺跡などでは集落域は丘陵部へと移り、高地性集落を形成するようになる。後期になると平野部で集落が営まれるようになるが、西浦谷遺跡では継続的な定住生活が後期前半まで続いたようである。後期の遺跡としては鹿伏・中所遺跡、移入遺跡、西上居遺跡群、池戸鍋潤遺跡、田中南原遺跡などがあり、近年の調査で確認されている。なかでも鹿伏・中所遺跡、田中南原遺跡では古墳時代前期にかけて長期的な拠点集落が営まれたことが伺える。墓制については鹿伏・中所遺跡で土器棺群が多数検出されており、集落内に墓域が形成されたようである。当遺跡の西方に位置する犬神山では周溝墓を含む土壙墓群が検出されている。西上居遺跡群では丘陵尾根稜線上に方形台状墓や土壙群が検出されており、これらは中期後半から終末期にかけての所産である。



第3図 周辺の遺跡位置図 (1/25,000)

- | | | |
|---------------|------------|-----------------|
| 1 高松市前田東・中村遺跡 | 13 野越古墳 | 25 鳥打大西谷古墳群 |
| 2 西浦谷遺跡 | 14 高野八幡社古墳 | 26 陰浦古墳群 |
| 3 権八原古墳群 | 15 農字部遺跡 | 27 緑ヶ丘古墳群 |
| 4 高尾遺跡 | 16 砂入遺跡 | 28 小倉東丘古墳 |
| 5 池戸八幡社裏古墳 | 17 大塚城跡 | 29 長谷古墳 |
| 6 池戸八幡社古墳群 | 18 南天枝遺跡 | 30 塙地藏南丘古墳 |
| 7 池戸鍋湖遺跡(包蔵地) | 19 福万遺跡 | 31 錦倉塚 |
| 8 権八原遺跡(包蔵地) | 20 旧長楽寺跡 | 32 白山1遺跡(銅鐸出土地) |
| 9 七ツ塚古墳群 | 21 鹿伏・中所遺跡 | 33 白山2遺跡 |
| 10 富士の越山頂古墳 | 22 高岡城跡 | 34 白山3遺跡 |
| 11 始覚寺跡 | 23 天神山古墳群 | |
| 12 尾崎塚(中世) | 24 鳥打古墳 | |

古墳時代になると周辺地域で前方後円墳の築造がみられ、東隣の長尾町では丸井古墳、中代1号墳、稻荷山古墳が知られる。また、西隣の高松市久米山には茶臼山古墳があり、有力首長の存在が考えられる。町内では近年の測量調査で池戸八幡神社1号墳が町内唯一の前方後円墳であることが確認され、低平な前方部から前期初頭に位置づけられる。中期の古墳としては香川医科大学病院建設に伴う調査で検出された権八原古墳があり、古式群集墳で著名である。後期になると古墳の分布は町内全域に拡がりをみせ、町の南北の丘陵にその多くが所在する。北部丘陵の南麓には風呂谷古墳、深谷古墳、椿社古墳、塚谷古墳など単独で比較的大型の古墳が築造されている。また、南部丘陵では丘陵先端部に単一の古墳が点在するが、蛇の角古墳群、諏訪カンカン山古墳群、四土居古墳群など10数基からなる群集墳がみられる。白山の西方の天神山古墳では出土遺物の時期幅や石室の拡張などから追葬が確認されている。また、白山北裾より派生する低丘陵では鳥打大谷古墳、狸地蔵南丘古墳などが点在している。

古代に入ると、白鳳期から奈良時代にかけて始覚寺、長楽寺、上高岡廃寺などの古代寺院の建立が進み、南天枝遺跡では同時期の集落が確認されている。律令体制が確立してくると地方行政区分として畿内七道制度が整備された。『延喜式』によると、讃岐には南海道があり6駅が設けられ、現在の長尾街道に沿って東西に通っていたと考えられる。『南海流浪記』に記載されていることを考えると鎌倉時代には白山は一つの宿駅的な意味をもっており、白山権現が宿坊として使われたと思われる。

南北朝期には争乱が全国に波及し、細川清氏が北朝方から離反して南朝につき、白山で挙兵したが、細川頼之との戦いで敗れ戦死した。現在、白山西麓にある香川県畜産試験場の入口北の新田神社の傍らに細川清氏を祀る五輪塔がある。また、明治24年、白山南麓の白山神社境内の東側の境外社有墓地にあつた柏木の下で古銭壹が出土し、1万枚の宋銭が見つかったとされる。当時、白山権現の経済力を誇示するものであり、細川清氏がここで挙兵した理由もまた古銭の出土によってうなずけるといえる。

戦国時代には白山に白山城があり『全譜史』、『讃岐国名勝図会』には「白山に在り往古、細川掃部これに居る」と書かれてあり、その所在については不明である。また、城主は細川掃部であるが、掃部頭直之のことであるという。

天正5年には十河一存は篠原自通・重清豊後守を討つために、先陣に神内右京進清宅・植松ら50騎、総勢500余人、中軍には三谷・大熊・池田各50騎、総勢600余人、大殿には一存自ら50騎、総勢500余人、その他三木郡の兵を多数従えて白山で大合戦が行われたと伝えられる。篠原氏に従うものは七条賢信・板東・板西のものども、並びに阿波川島一族であった。一存の庶子植松万寿はわずか13歳であったが、よく戦い、敵の勇将板東八郎の首をとり、その他のものも敵の首386級もあげた。これを白山合戦というが、白山のどこで合戦があったのかは不明である。

これらのことから、白山は戦略上要塞的立地条件を成しており、現在に至るまで三木町において、交通上重要な拠点的役割を果たしていたと考えられる。

参考文献

三木町史 三木町史編集委員会 1988.3

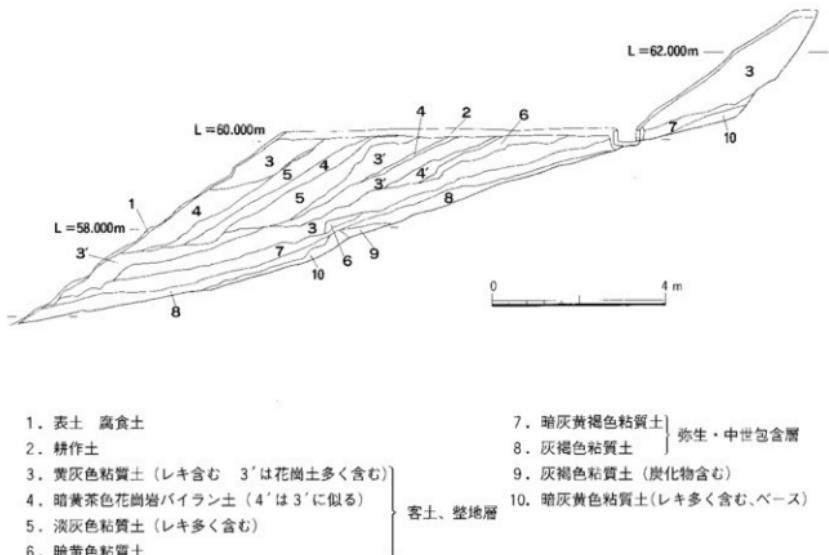
第3章 調査結果の概要

(1) 調査区の概要

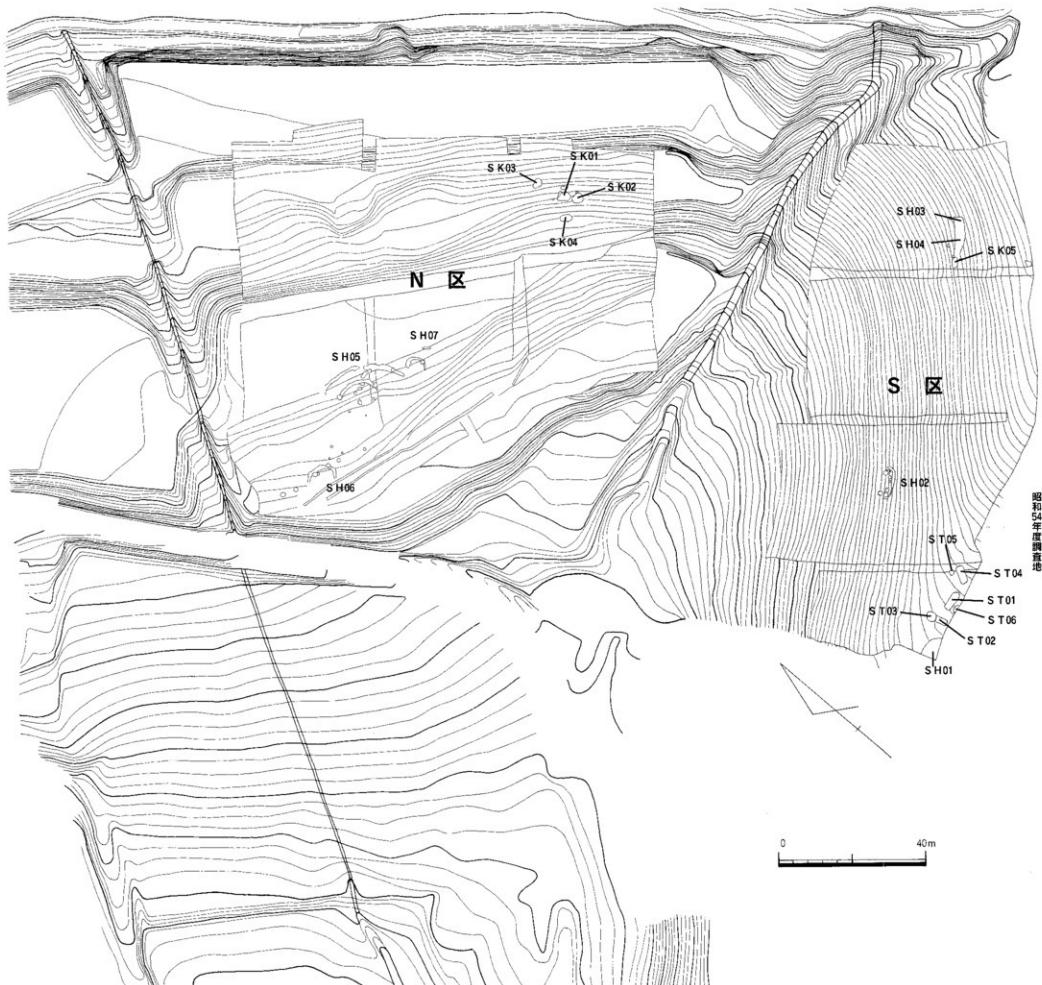
今回の調査では香川県教育委員会が昭和53年の発掘調査及び平成5年の試掘調査結果をもとに事前調査を実施した。白山の南裾より派生する丘陵部の南東側は土地造成に伴い、急峻な崖が生じており、その残存している丘陵尾根部とその西側急斜面部を便宜上S調査区とした。そのS区からは昭和53年調査の残存している竪穴住居跡を含め4棟、丘陵尾根部では配石土壙1基、箱式石棺1基、土壙墓4基を検出した。S区の基本層序は、尾根部には表土直下が地山となり、斜面部は厚い自然堆積層が形成されている。その最下層に弥生土器包含層が形成されている。

また、白山の南裾部にあたる緩傾斜面を調査区とするN区は県畜産試験場の農業用地として大幅な整地造成がなされたようである。整地造成から免れた所では遺構は希薄であったが、斜面上位より焼成土坑を4基を検出した。斜面下位からは竪穴住居跡を3棟、ピット等を検出した。

以下では検出した遺構の概要を記述する。



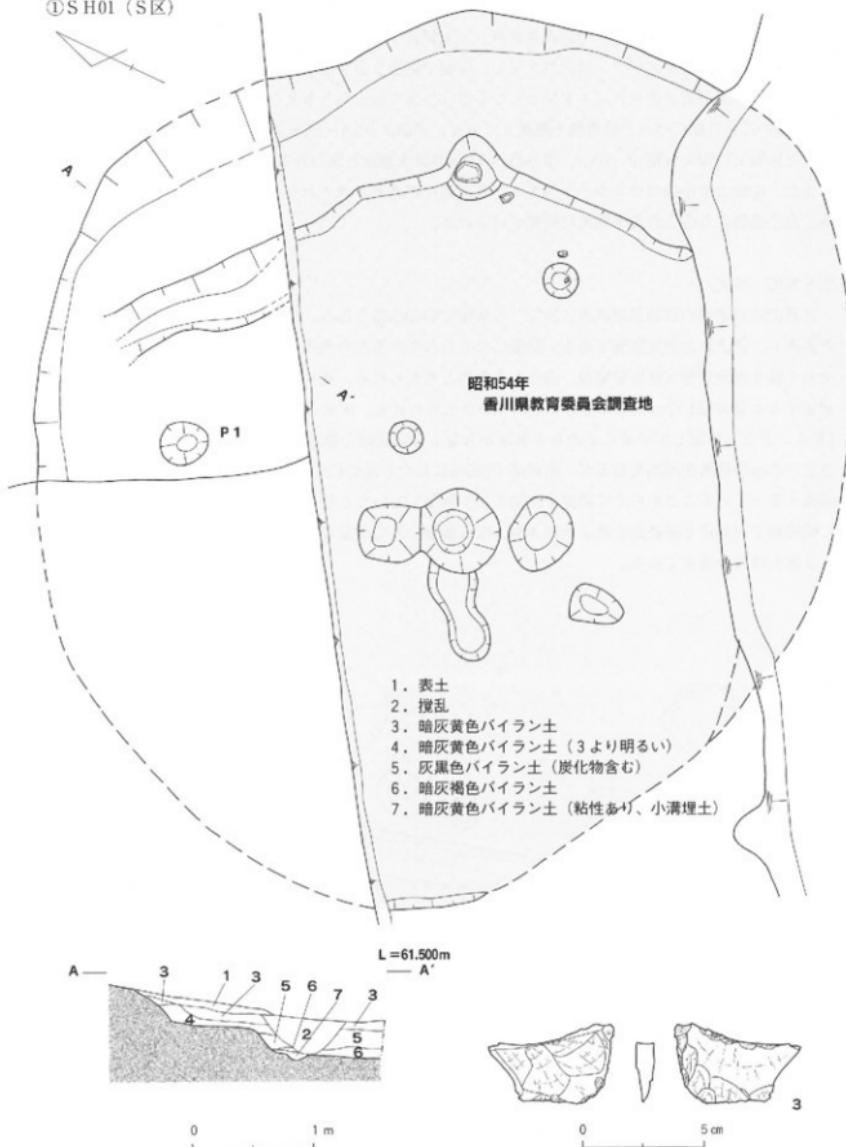
第4図 N区北壁土層断面図



第5図 調査区構造配置図

(2) 各遺構の概要

① SH01 (S区)



第6図 SH01平・断面図及びSH01出土遺物実測図

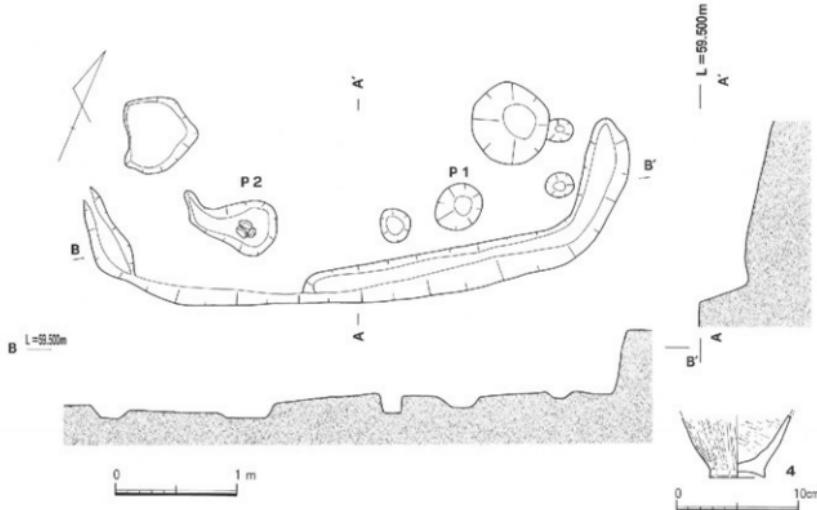
S H01は南に緩やかに下降する丘陵の尾根平坦部に位置する唯一の堅穴住居で標高61mを測る。昭和54年には南北部が調査されており、今回はその残部の調査となる。残部のうち北半部の西側は採土工事に伴って失われている。また、今回調査を行った東側についても配管による擾乱が著しい。前回の調査と併せて想定すると平面プランは円形を呈し、床面で直径6mを測る。P 1は幅40cm、深さ30cmを測るピットで過年度調査を併せれば4本柱からなる堅穴住居であったと考えられる。床面の北側では、幅66~122cmの三日月状にベッド状遺構を確認しており、床面より5.4~6.7cm高くつくられている。ベッド状遺構と床面との間には幅12~20cm、深さ4.0~7.7cmの排水施設と思われる溝を検出した。

また、床面より多数のサスカイト製チップ及び剥片が検出されており、石器製作が行われたようである。出土遺物より弥生時代中期末に位置づけられる。

② S H02 (S区)

S H02は谷地形の西側急傾斜面に約70°の角度で約40cm掘り込み、掘削土を利用し盛土を行って床面を形成し、営まれた堅穴住居である。斜面につくられているため全体の半分程しか遺存しておらず、おそらく盛土部分が堅穴住居放棄後、流出したものと考えられる。従って、本来のプランを遺存部分より想定すると最大幅1.52mの隅丸方形を呈していたと思われる。床面より主柱穴と思われるピットを2つ(P 1、P 2)確認していることから4本柱からなる堅穴住居と推定される。床面では幅14~24cm、深さ2~8cmの壁溝が周囲を巡るが、南西部で140cmにわたり途切れている。その部分は床面より2.5~5.1cm高くなっていることから主に東側を玄関として利用していたと思われる。

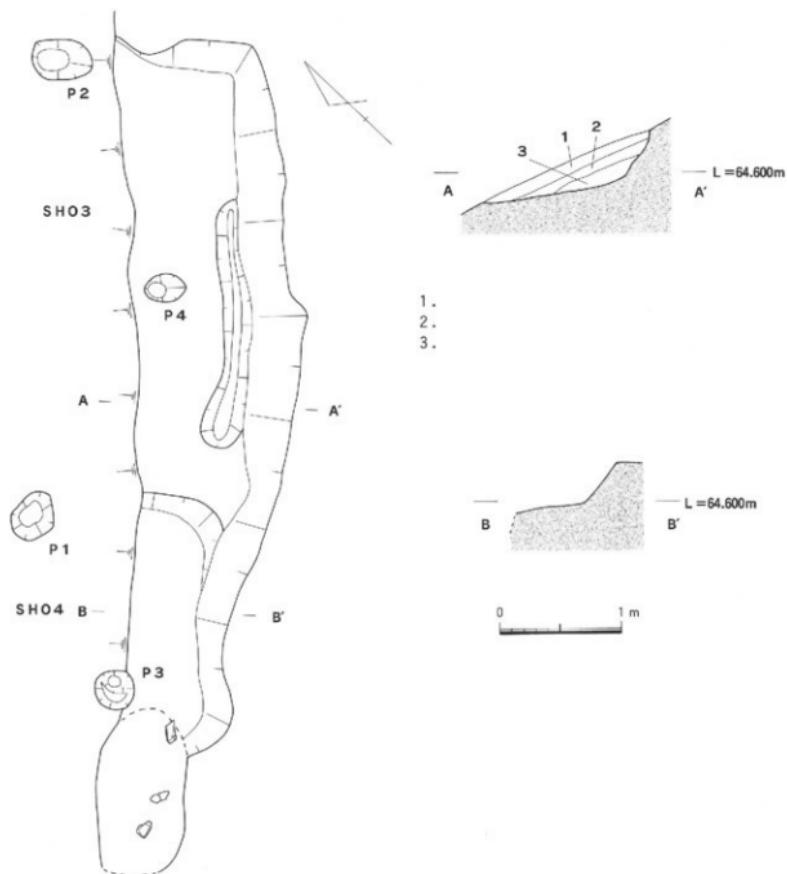
検出面で石斧片と不整形土坑より石3点、床直遺物として少量の土器細片を検出しておらず、出土遺物より弥生時代中期末である。



第7図 S H02平・断面図及びS H02出土遺物実測図

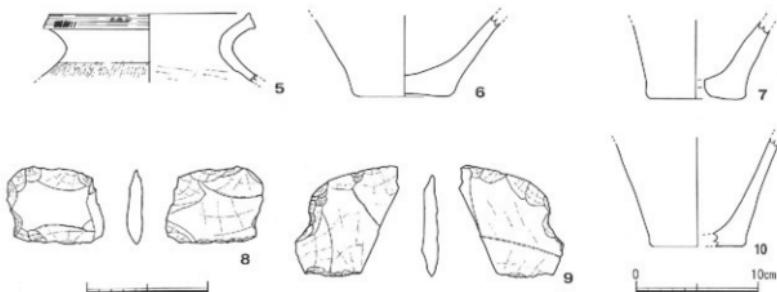
③④ SH03、04 (S区)

S H03、04はSH02の北方の上位で検出された切り合い関係にある竪穴住居で、SH02と同じく斜面につくられているため遺存部分が少ない。SH03は約60°の角度で40~50cm程掘り込んでつくられ、營まれた竪穴住居である。ピットの配置よりP1、P2はSH03に伴う主柱穴であり、最大幅4.30mを測り、隅丸方形をプランとする竪穴住居と想定される。床面では幅18~33cm、深さ0.8~2.9cmの壁溝が約2mにわたり確認された。また、SH03を検出し、掘り下げたところ西隅付近で浅い落ちが認められた。この部分の埋土は暗黄色砂質土でSH03とは明らかに異なっていた。この埋土と同質土の拡がりがさらに西方で2m程認められたため、より古い時期の竪穴住居が存在しているものと考えられ、これをSH04とした。SH04は時期不明の土坑で切られているが、床面では主柱穴と思われるピット(P3)を検出した。SH03の中央から検出したP4もSH04に伴うものと推定される。こう考えると最大幅約4.50



第8図 SH03、04平・断面図

mでSH03とほぼ同タイプの竪穴住居であったと考えられる。SH03から遺物は確認していないが、下方包含層より転落と思われる遺物を多く検出している。弥生時代中期末の所産と推定される。



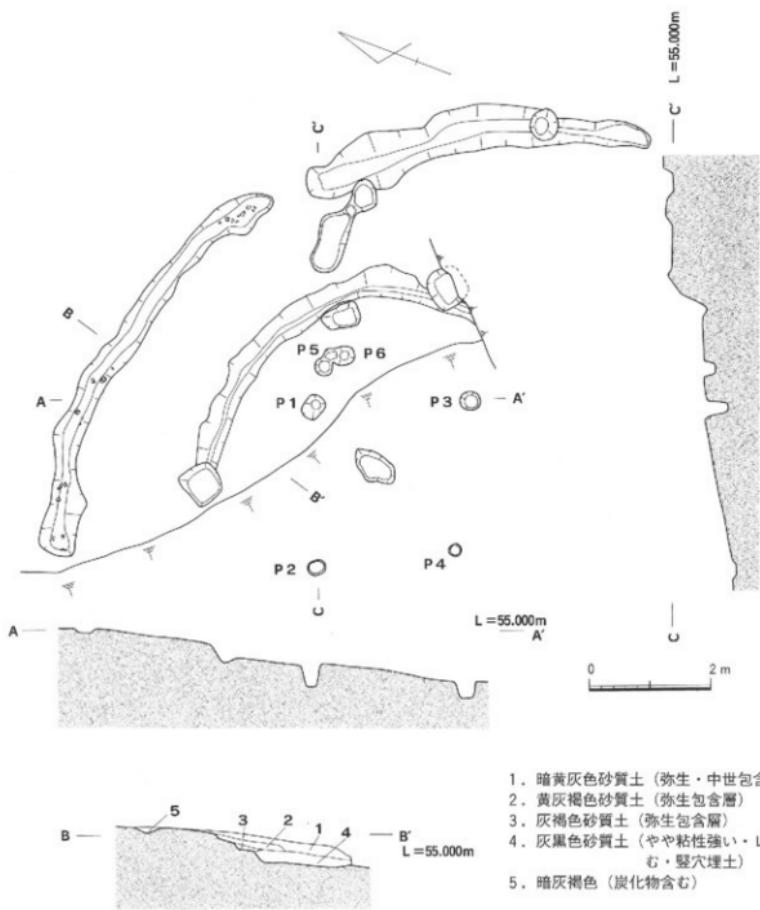
第9図 SH03、04下方のS区包含層出土遺物実測図

⑤SH05 (N区)

SH05は今回の調査で最も良好な状態で検出された竪穴住居であり、白山南裾に披がる緩傾斜地に位置する。南半部は流失により確認できないが、遺存部分より床面の直径は6m程度と思われ、平面プランは円形を呈する。また、ビットP1～P4は配置より主柱穴と考えられる。床面からは幅8～22cm、深さ2.7～4.6cmの壁溝を確認している。床面中央付近では不整形を呈する土坑を確認しており、埋土に炭化物が多く含んでいることから炉跡であると考えられる。

また、竪穴住居の掘り方に60～90cm離れ、ほぼ平行して住居屋根の垂先が接する位置に溝が巡っている。これは、排水溝であると考えられ、住居の上方にこのような溝を配することで雨水の流入を防いでいたと思われる。この外周溝は幅32～96cm、深さ4.2～26.6cmを測るが、北東部では幅60cmにわたり途切れている。また、床面北部寄りでは2個の連結したビットP5、P6を検出した。このことから、傾斜の上方側を出入口として機能した可能性が高く、この2つのビットは梯子の下端部を埋めていたものではないかとも思われる。

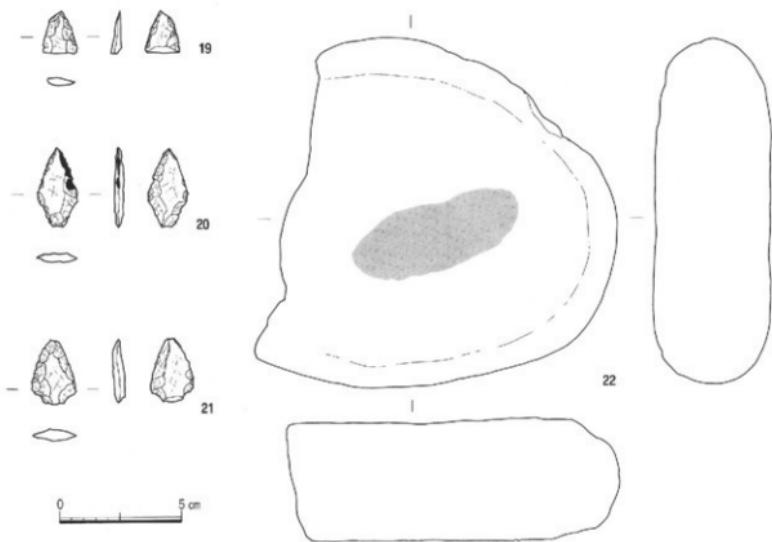
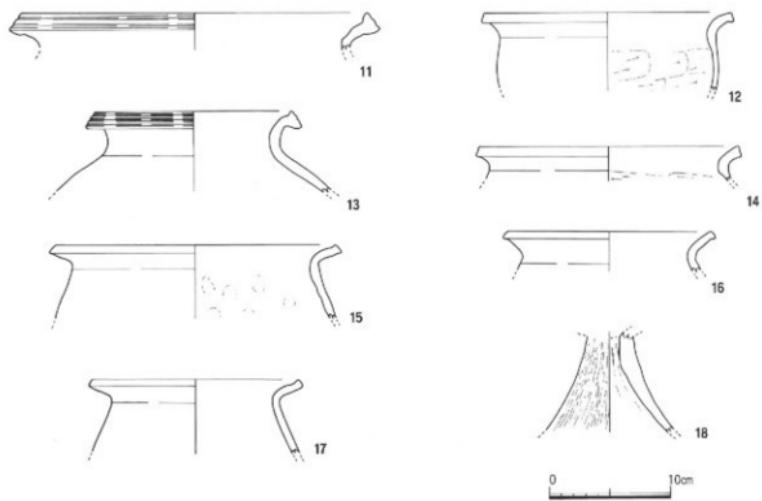
外周溝より石錐、床直遺物としてサヌカイト片、多量の上器を検出しており、弥生時代後期初頭に位置づけられる。



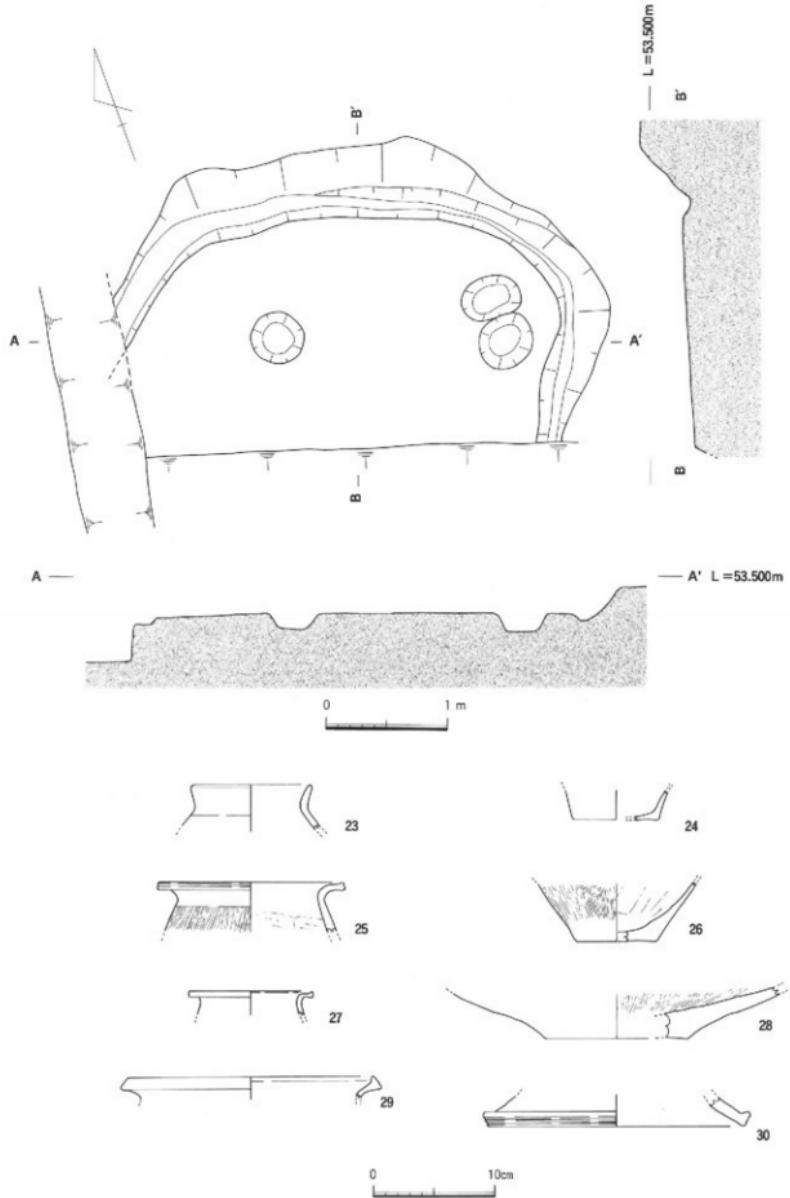
第10図 S H05平・断面図

⑥S H06 (N区)

S H06はS H05の南西に位置し、今回の調査では最も低所で検出された竪穴住居で検出面より30cm程掘り込んで形成している。南半部は削平により全体のプランは確認できないが、平面形態は隅丸方形を呈し、一辺は4m程度であったと思われる。床面からは幅3~22cm、深さ4.3~6.6cmの縫溝と主柱穴と考えられる2個のビットを検出している。また、床面、壁溝からは多量の土器を検出しており、出土遺物から弥生時代中期～後期初頭と推定される。



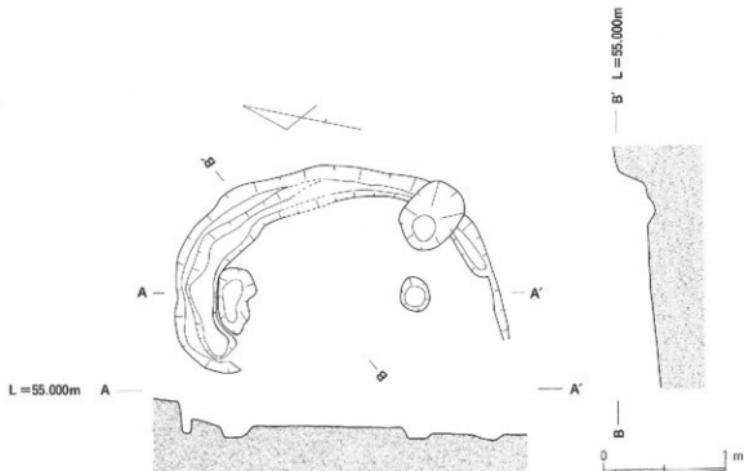
第11図 SH05出土遺物実測図



第12図 SH06平・断面図及びSH06出土遺物実測図

⑦ S H07 (N区)

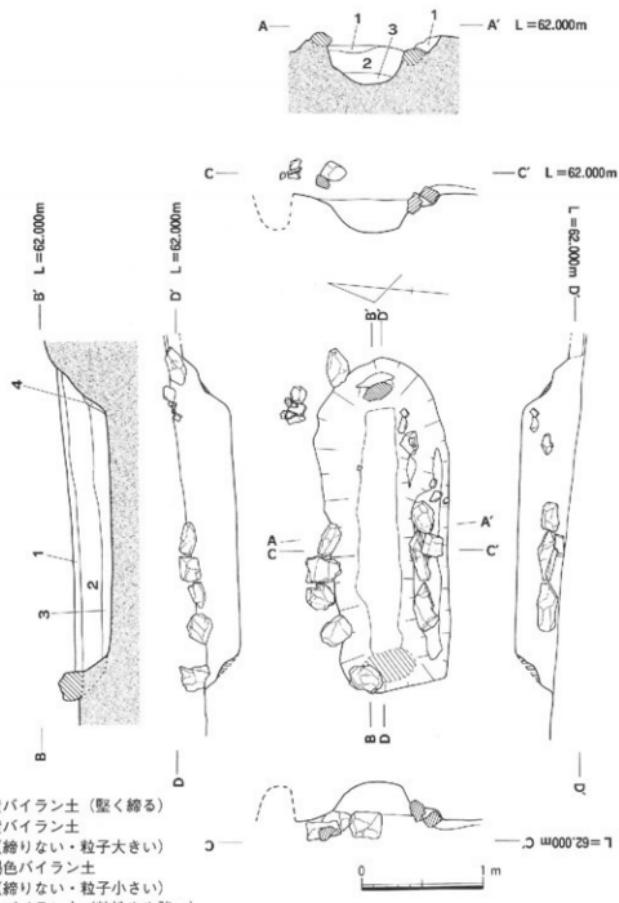
S H07はS H05の外周溝に東隣して検出された今回の調査では最も小型の竪穴住居である。南半部は流失により確認できないが、遺存部分から想定すると平面プランは円形を呈し、その規模は2.7m程度と考えられる。床面では幅3~16cm、深さ3.3~9cmの壁溝を確認している。床面より検出したピットは2穴で主柱穴に伴うものはP 1、P 2と考えられる。ピットの配置から4本柱からなる竪穴住居と考えられる。遺物は検出していないことから詳細な時期に關しては不明である。



第13図 S H07平・断面図

⑧ S T01 (S区)

S T01は尾根稜線上に構築された配石土壙墓で、土壙群の中心に位置する。尾根稜線に対しほぼ平行し、主軸方向はN85° Eをさす。掘り方は東西276cm、南北180~215cmで東小口が外に膨らむ円弧状の長方形プランで断面形は縦横とも逆台形状を呈する。東側短辺部と南側長辺部は2段掘りとなっており、ほぼ中位に幅10~25cmのテラスを設けている。床面は東西202cm、南北25cm~37cmを測り、地形の低い西小口に向かってやや下降傾斜をみせるものの、ほぼ平らな面を保つ。北側掘り方付近と南側掘り方下方のテラス部分には小児頭大の河原石が直列状に検出された。また、西小口部には幅47cm、厚さ6cm、東小口部テラス部分には幅26cm、厚さ2cmにわたり黄白色の粘土塊を施しており、木棺を固定するため用いたと思われる。床面は、U字形を呈しているため、木棺は舟形に近い形であったと思われる。遺物は弥生土器を東小口寄りの転落石上に1点と埋土から2点検出している。胎土・色調から弥生時代中期末~後期初頭のものと推定される。また、土層の観察によると配石後、厚さ10cm以上の盛土が行われていたようである。



1. 暗灰黄バイラン土 (堅く締る)
2. 暗灰黄バイラン土
(締りない・粒子大きい)
3. 暗灰褐色バイラン土
(締りない・粒子小さい)
4. 暗黄色バイラン土 (粘性やや強い)

第14図 S T 01平・断面図

⑨ S T02 (S区)

S T02はS T01の西で検出されたもので、形状から土壙墓と推定される。主軸は尾根稜線に対して直交する。また、S T03と切り合い関係にあるため遺存部分は南北170cm、東西80cmの長方形プランをもって造られている。掘り込みの深さは15cm程度で浅く、断面形は逆台形状を呈する。床面はほぼ水平な面を保ち、南小口付近の床面からは土器片が出上している。色調・胎土から弥生時代中期～後期初頭と推定される。

⑩ S T03 (S区)

S T03はS T02を切る形で構築されており、平面形は楕円形を呈する。断面形は円弧状を呈する。平面・断面ともに他の土壙と異なるが、理土に相違は認められないで墓と判断した。主体内部からの副葬遺物は何も検出していないことから時期に関しては不明である。

⑪ S T04 (S区)

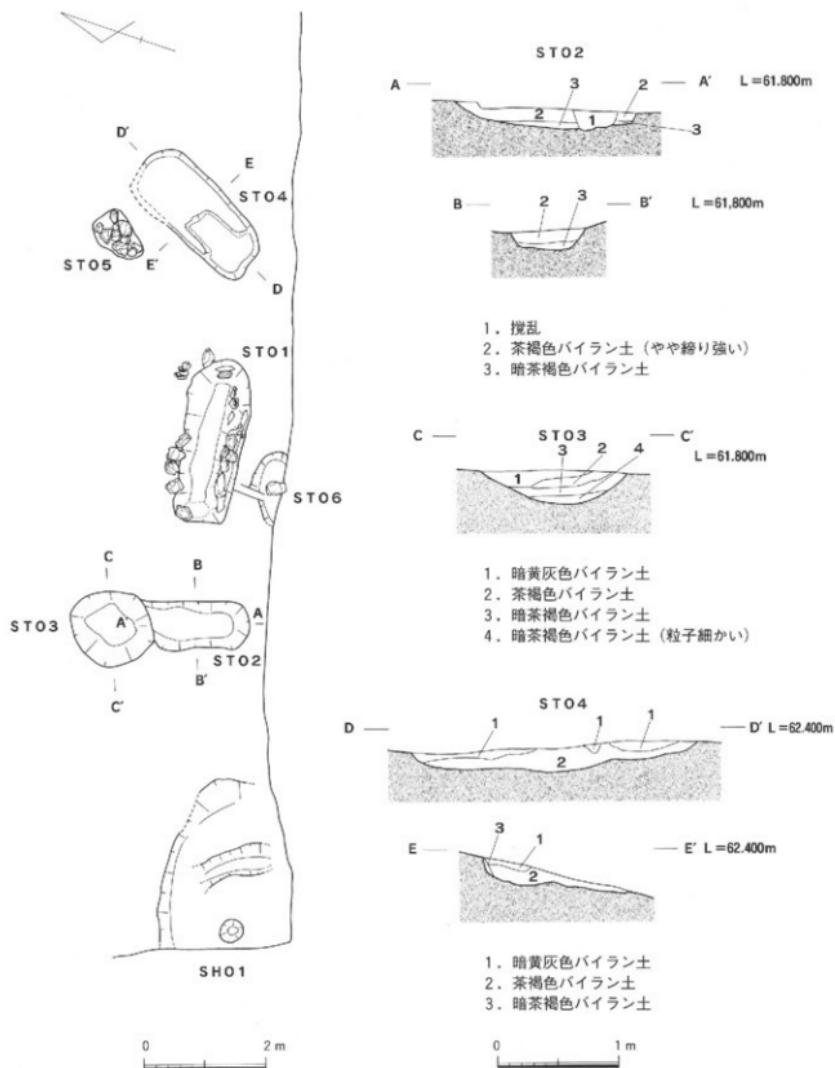
S T04はS T01の北で検出された長方形のプランを呈する土壙墓であり、尾根稜線に対し斜交する。南西隅部付近は尾根稜線上に配されている水道管による擾乱を受けている。掘り方のプランは、長径234cm、幅104cmを測り、深さは13～15cmと浅い。断面形は逆台形状を呈する。床面はほぼ水平を保ち東半部では6cm程高く、張り出している。南側短辺付近で拳大の山石を2個と床面のやや中央寄りで弥生土器片を検出している。

⑫ S T05 (S区)

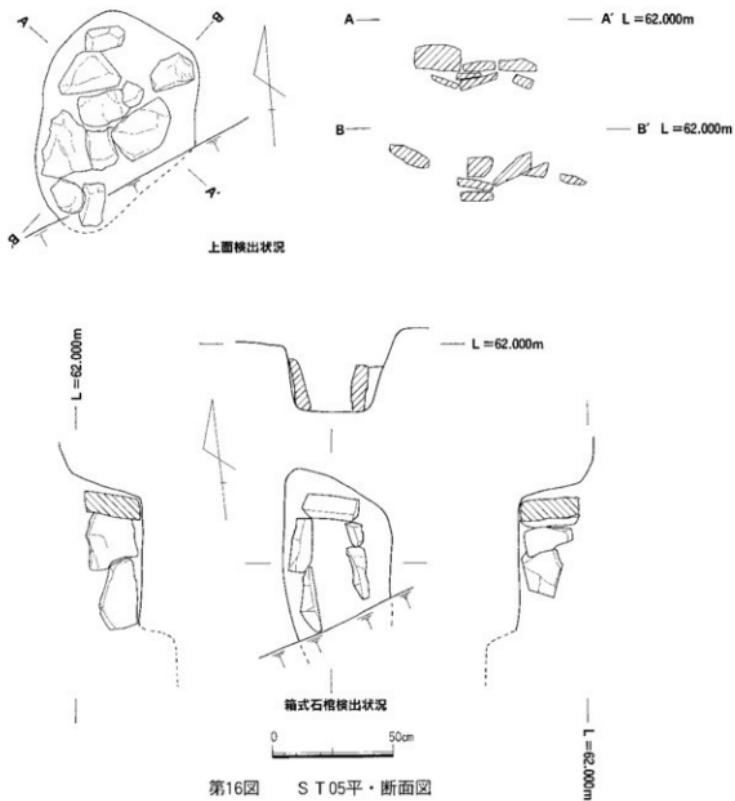
S T05はS T04の西隣で検出された小型の箱式石棺である。東隅部は、水道配管による擾乱がみられる。最初、掘り方上面を覆う形で小児頭大から人頭大の塊石群を検出した。この集石は石棺上面を覆う形に敷きつめられており、中央部は2～3段になっていた。この塊石群を取り除くとドから小型の箱式石棺を検出した。主体部の主軸方向は尾根稜線に対しほぼ直交で、N 6° Eを示す。使用石材は白山産出の安山岩の平石で構築されている。北短側壁1、東西両長側壁2の計5個を数え、長方形の平石を矩形に立て並べたもので南短辺は欠損している。北短辺には幅22cm、高さ24cm、厚さ8cmのほぼ正方形の平石を使用している。石棺の内法は幅14～16cm、長さ47cm以上を測る。側壁の石材は長さ10～26cm、高さ16～20cm、厚さ2～6cmと不揃いである。墓壙は幅45cm、長さ72cm以上を測り、断面形は逆台形状に整然と掘られている。主体内部からの副葬遺物は何も検出していないことから時期に関しては不明である。

⑬ S T06 (S区)

S T06は尾根稜線上に位置し、S T01に東隣して検出された土壙墓である。採土工事に伴い、東半部は欠損しているため、南北120cm、東西50cmを確認したにすぎない。遺存部分より想定すると長方形のプランを呈し、主体部の主軸方向は尾根稜線に対し、直交していたと思われる。主体内部より人頭大の塊石を1個検出したが、時期については不明である。



第15図 SH01、ST01、02、03、04、05、06平面図及びST02、03、04断面図



第16図 S H05平・断面図

⑩SK01 (N区)

S K01は白山南麓の緩傾斜面に位置し、S H05より高位で検出された焼成土坑である。掘り方の平面形は不整形で、断面形は逆台形状を呈する。埋土には炭化物層が堆積しており、床面では全域から焼成上の拡がりが確認された。また、ここからは小兒頭大から人頭大の白山産出の軟石の集石が確認されたが、規則性はみられなかった。また、遺物は検出していないことから時期に関しては不明である。同遺構の北では溝状造構も検出している。

⑩ S K02 (N区)

S K02はS K01に東隣して検出された焼成土坑である。掘り方のプランは不整方形で断面形は逆台形状を呈している。床面では全域にわたり焼土の拡がりを確認しており、床面西では土師製小皿を1点検出している。出土遺物より中世期に位置づけられる。



⑪ S K03 (N区)

S K03はS K01の北西で検出された不整形の土坑で自然の落ち込み程の窄みがみられる。遺物は確認していないことから時期決定は難しい。

第17図 S K02出土遺物実測図

⑫ S K04 (N区)

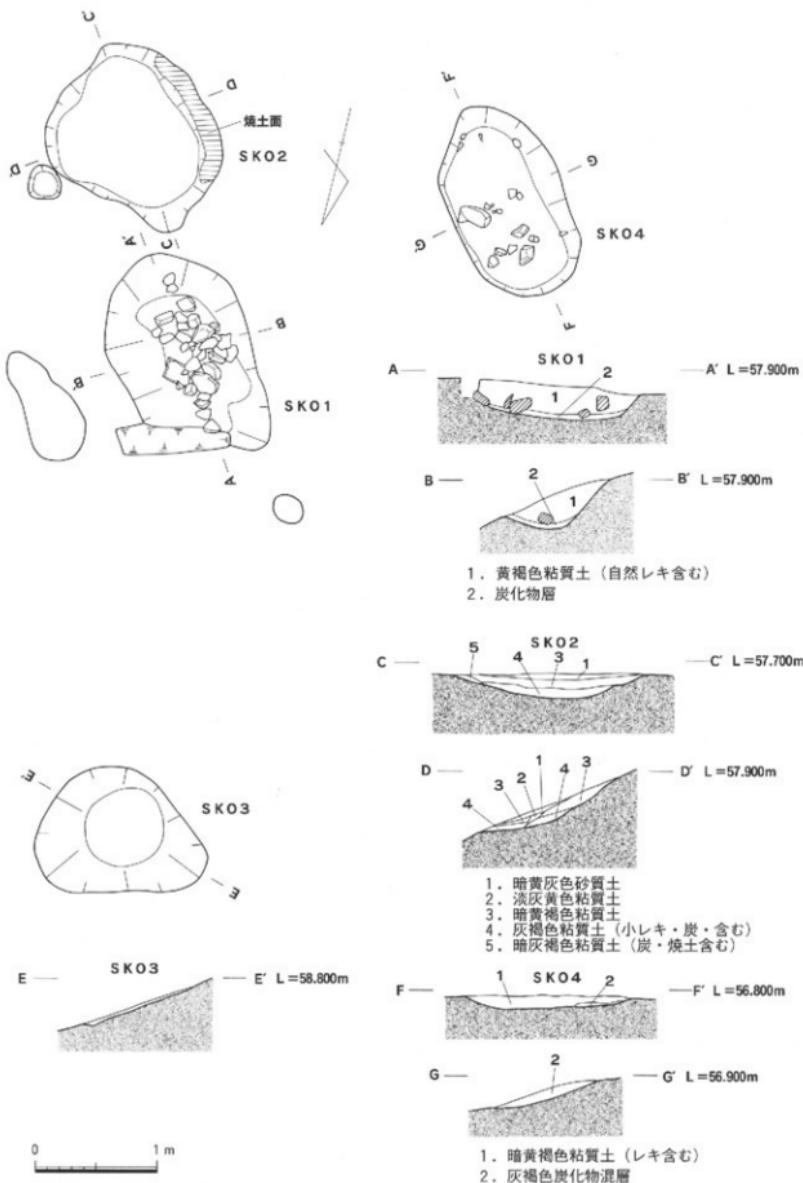
S K04はS K01の南で検出された土坑で平面形は不整方形を呈する。塊石が散在するが、規則性は、みられないことから埋没時の流れ込みと考えられる。遺物は確認していない。

⑬ S K05 (S区)

S K05はU字状の谷地形の西側急傾斜面のやや高位に位置する土坑である。斜面につくられているため遺存部分が少ないが、S H03と切り合ひ関係にあり、土層の観察によるとS H03、04が弥生時代中期末と想定されることから、同遺構は中期末以降である。床面から小児頭大の山石を3個検出している。



写真1 N区全景



第18図 SK 01、02、03、04平・断面図

第4章 ま と め

これまで白山3遺跡①は、昭和54年度の調査により白山南麓から派生する尾根稜線部とその東側緩傾斜面部に弥生時代中期後半もしくは後期の竪穴住居跡や箱式石棺の存在が知られていたが、今回の調査により同尾根西側急傾斜面部（S区）と谷筋を含む白山南側の緩傾斜面部（N区）にかけての広い範囲に、弥生時代中期末～後期初頭の時期の集落が展開していることが明らかになった。また、白山南側の緩傾斜面部からは中世期のビット群や焼成土坑も検出しており、長期的に集落が営まれたようである。

S区では、白山南麓から派生する尾根筋の稜線部とその東側緩傾斜面だけではなく、西側急傾斜面部にまで集落域が展開していることが明らかとなった。検出された遺構を考察すると尾根稜線部に居住域と墓域が混在しており、西側急傾斜面部は居住域として利用されたと考えられる。また、尾根稜線部から検出されたSH01を除く3棟の竪穴住居はすべて隅丸方形を呈しており、急傾斜面上に或る一定の間隔をおいて構築している。昭和54年度に調査された東側緩傾斜面部は墓域が形成されたようで、大型の箱式石棺が3基構築されている。今回、尾根稜線部で検出した土壙墓群は配石土壙を核として小型の箱式石棺や土壙墓からなり計画的に形成した様子が伺える。

また、N区は白山南側部に披がる緩傾斜面部に相当する。ここは中世土器包含層が認められるが、整地造成を免れた箇所についても遺構密度は希薄であった。緩傾斜面地の上位から焼成土坑を4基、SH05周辺からビット群を検出できたにすぎず、今回の調査では中世期の遺構の構造・性格等は明確にできなかった。下層面についても遺構密度は希薄であり、確認できた遺構は緩傾斜面地の下位で竪穴住居は3棟であった。これらの竪穴住居群はN区の住居より遅れて弥生時代後期初頭を中心とする時期に営まれたものであり、位置的にもS区とは別なグループを形成したようである。なかでもSH05は外周溝、梯子穴など住居の内外構造を明確にすることができた。

今回の調査は限定された調査ではあるが、白山3遺跡が3棟を一つの単位グループとし、集落が形成されていることが判明した。また、S区、N区の2つのグループにおいては、いずれもSH01やSH05のように住居の規模や立地の面で上位に立つ住居が存在しているという集落の構造を把握することができた。

白山山頂付近（白山2遺跡）からは石器を採集しており、詫岡町紫雲山山遺跡②、坂出市烏帽子山遺跡③、高松市摺鉢谷遺跡④などと同様、典型的な高地性集落と考えられる。それに対して、白山3遺跡は立地的には高地性集落とは言い難い。白山1遺跡は、第2章で述べたとおり、「六区袈裟撲文銅鐸」が出土しており、今回の調査と併せて考えると3ヶ所の遺跡が同時期に有機的な関係をもって遺跡群を構成しているものと考えられる。同じような遺跡群として、四区画の袈裟撲文と思われる銅鐸が出土した明神原遺跡⑤、高所の烏帽子山遺跡などからなる烏帽子山周辺の遺跡群がある。このことより、今回の調査によって白山遺跡群全体の構造が具体的に理解できるようになっただけでなく、多くの高地性集落を分類する時に一つのパターンとして把握することもできるものと思われる。従って、今後、高地性集落の類型化や性格を考える上で欠くことのできないものと言えるであろう。これが今回の調査の最大の成果と言える。

〈註〉

- ①齊藤賢一他 『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和54年度』香川県教育委員会 1980.3
白山遺跡 『新編 香川叢書 考古編』香川県教育委員会 1983.3
- ②小林行雄他 『紫雲出 香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』詫間町文化財保護委員会 1964.9
- ③今井和彦 『坂出市内遺跡発掘調査報告書 平成5年国庫補助事業報告書 烏帽子山遺跡』坂出市教育委員会 1994.3
- ④押鉢谷遺跡 『石浦尾山塊古墳群調査報告』高松市教育委員会 1973.3
- ⑤明神原遺跡 『新編 香川叢書 考古編』香川県教育委員会 1983.3

なお、『香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』において、N区の南隅部から南北朝期と思われる居館の石垣を約30mにわたり検出し、また、平行して横列と考えられるピット群を検出したと報告した。それらのうち前者については、近代以降の可能性が高いことが判明したため、今回の報告から除外した。



写真2 白山3遺跡遠景（西方の天神山から）



写真3 N区調査前状況（南西から）



写真 4 S区調査前状況（西から）



写真 5 N区調査前状況（南から）

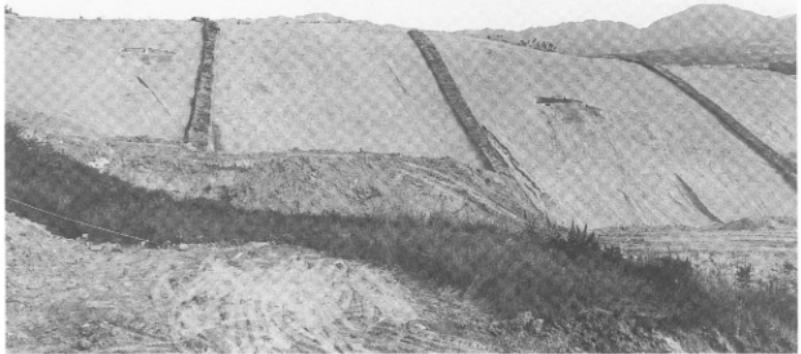


写真 6 S 区完掘状況（北西から）



写真 7 S 区完掘状況（北から）

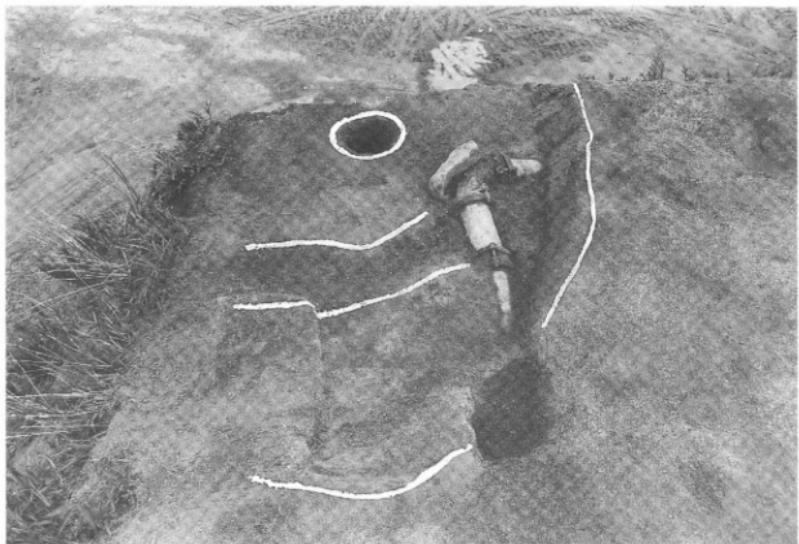


写真8 S H01発掘状況（東から）



写真9 S H02遺物出土状況（北東から）

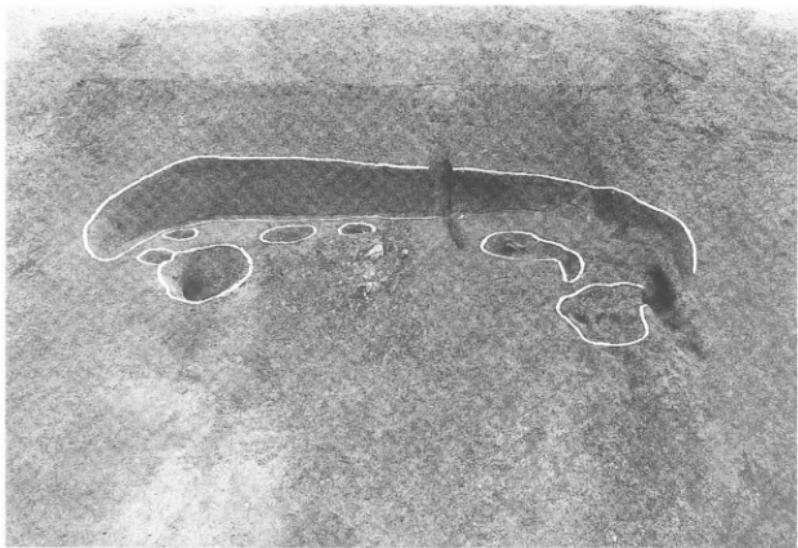


写真10 SH02完掘状況（北西から）

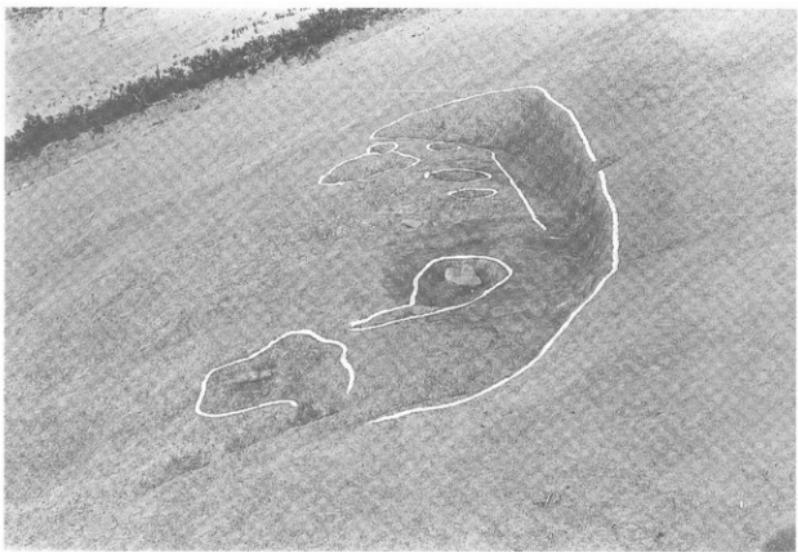


写真11 SH02完掘状況（南西から）

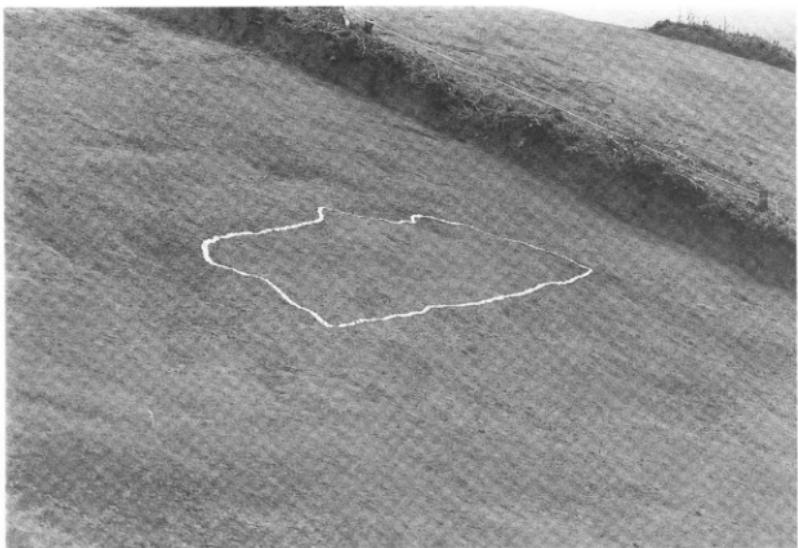


写真12 SH03検出状況（北東から）

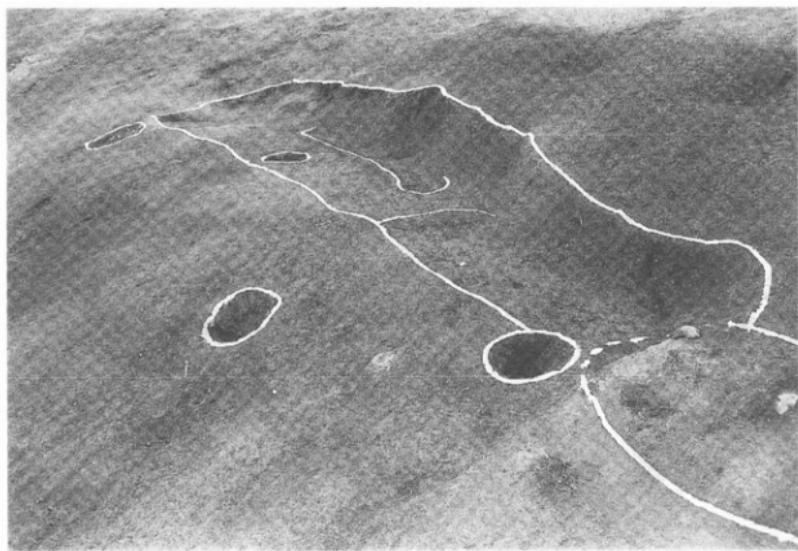


写真13 SH03、04、SK05完掘状況（西から）

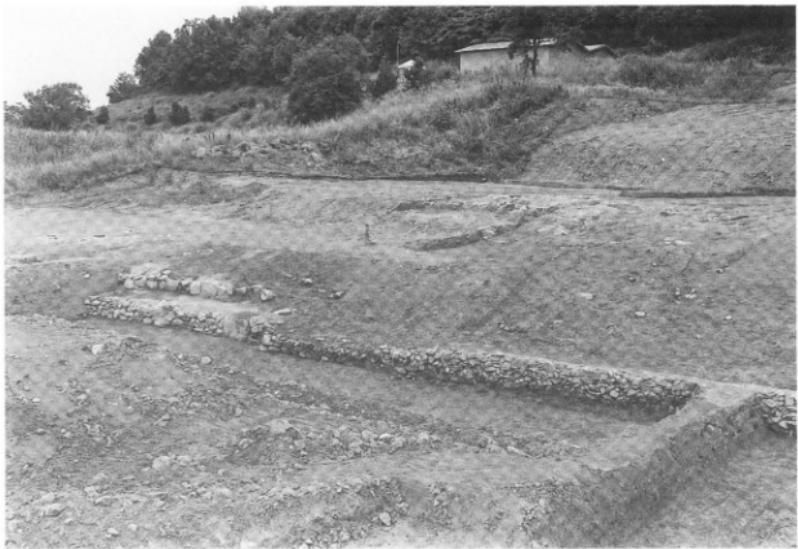


写真14 N区完掘状況（南から）



写真15 SH05完掘状況（西から）

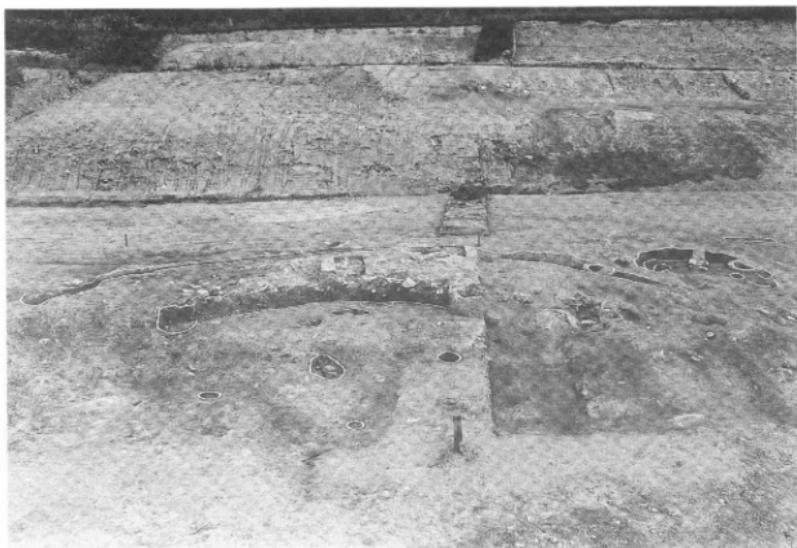


写真16 SH05、07完掘状況（南西から）

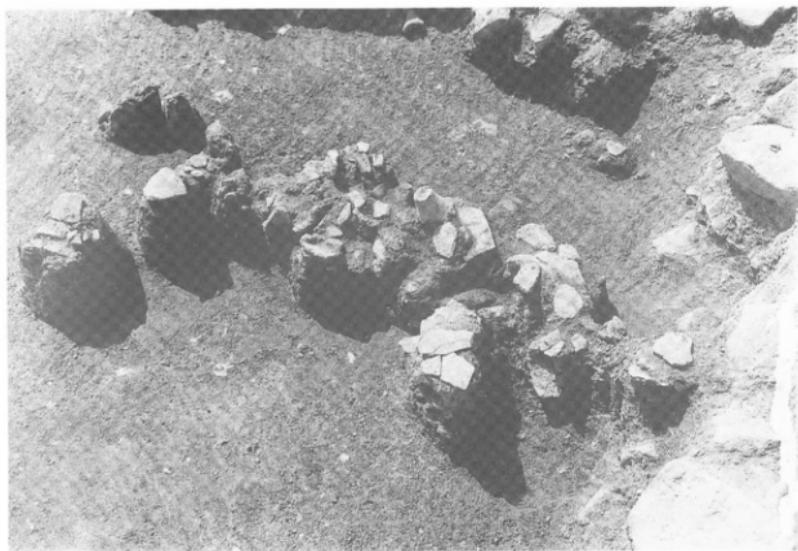


写真17 SH05内遺物出土状況

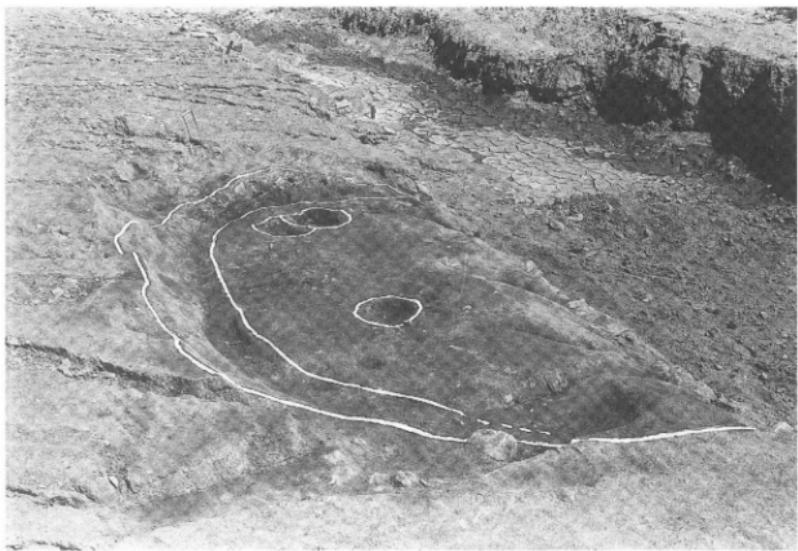


写真18 S H06完掘状況（北から）

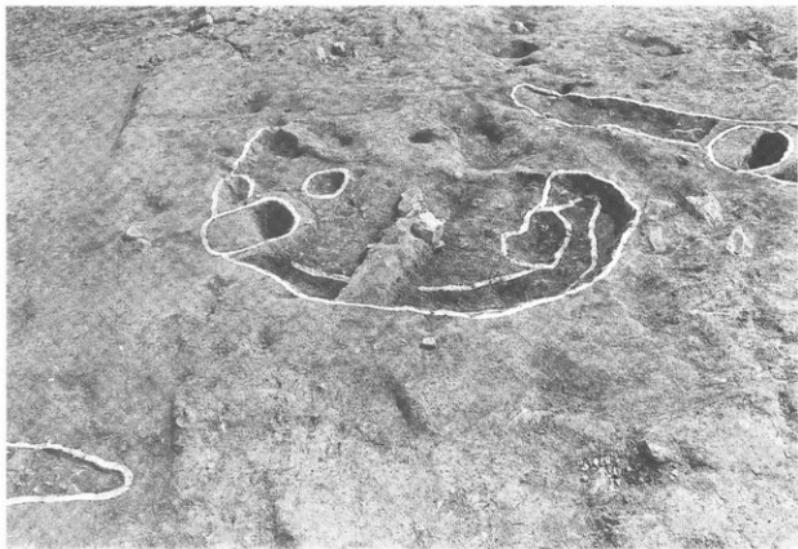


写真19 S H07完掘状況（北から）

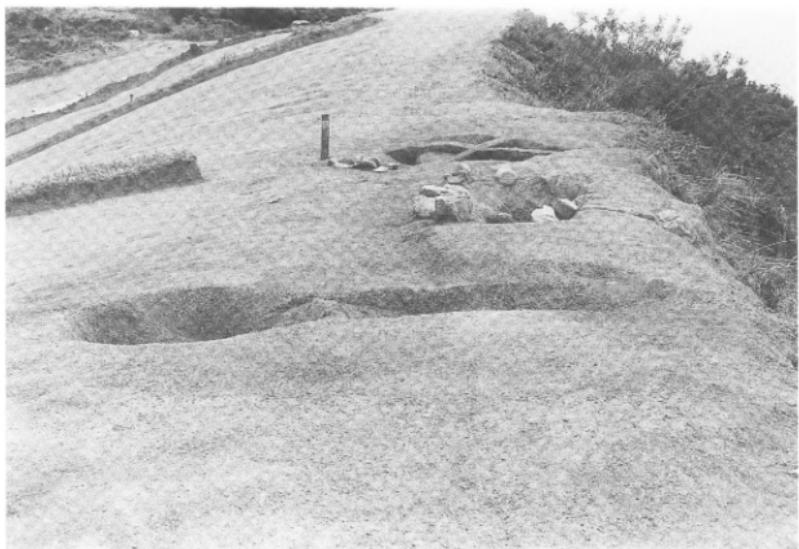


写真20 土塚墓群（西から）



写真21 土塚墓群（東から）

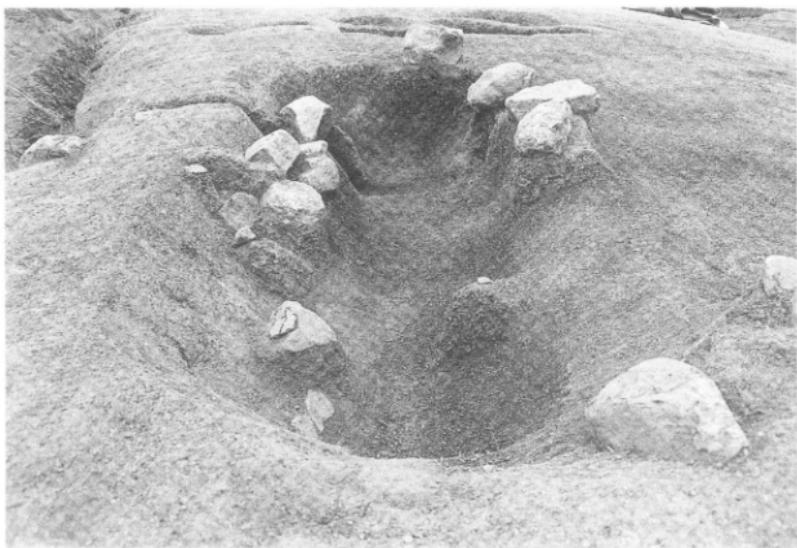


写真22 ST 01遺物出土状況（東から）



写真23 ST 01完掘状況（東から）

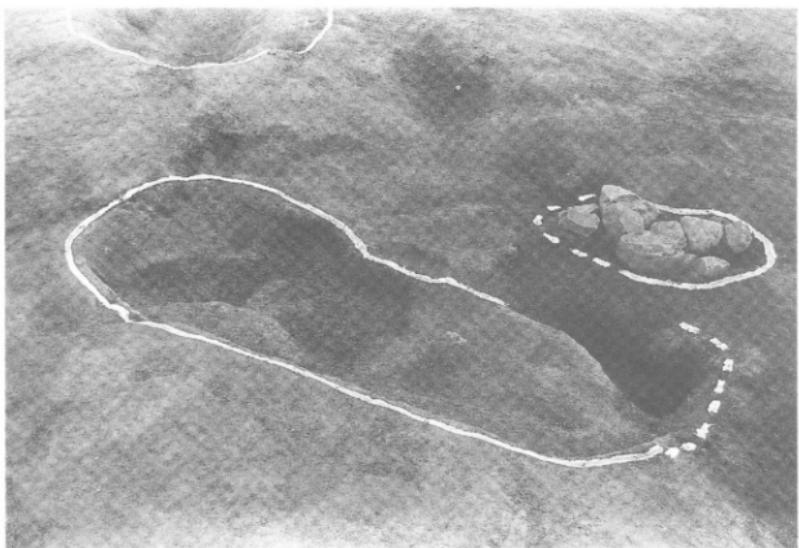


写真24 ST 04完掘状況、ST 05塊石群検出状況（南東から）



写真25 ST 05石棺検出状況（北東から）



写真26 SK 01~04検出状況（西から）

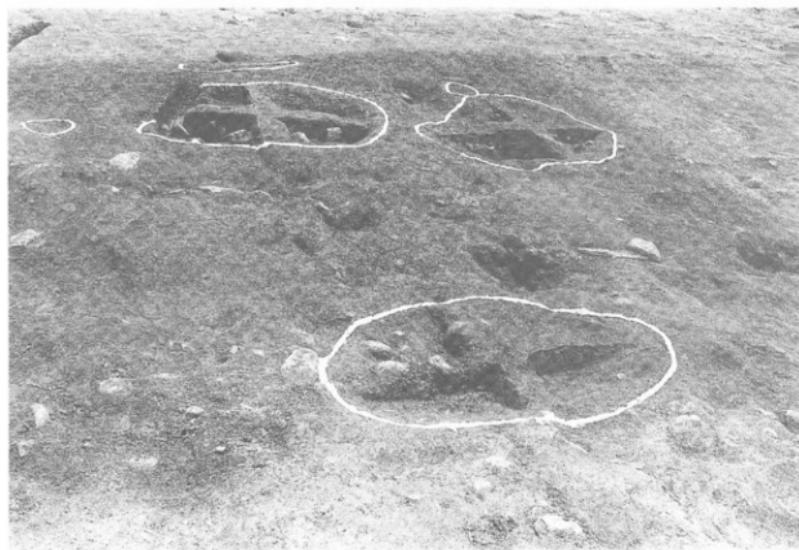


写真27 SK 01、02、04埋土の状況（南から）

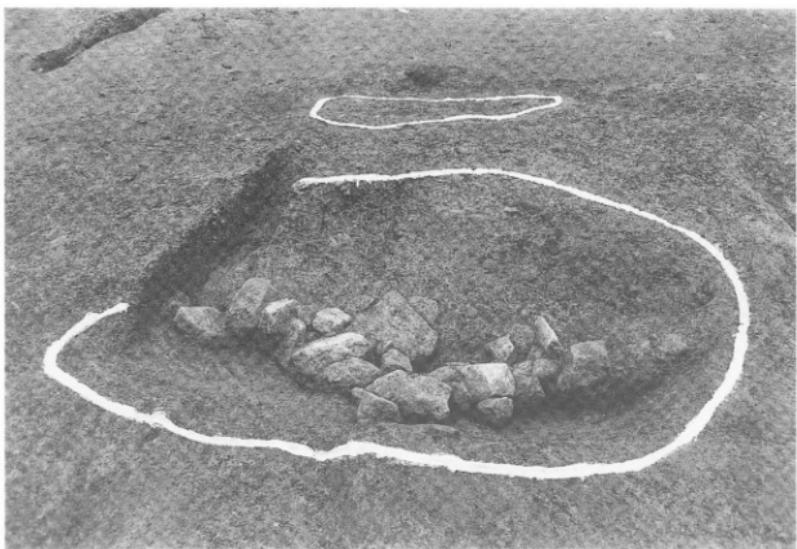


写真28 SK 01完掘状況（南西から）

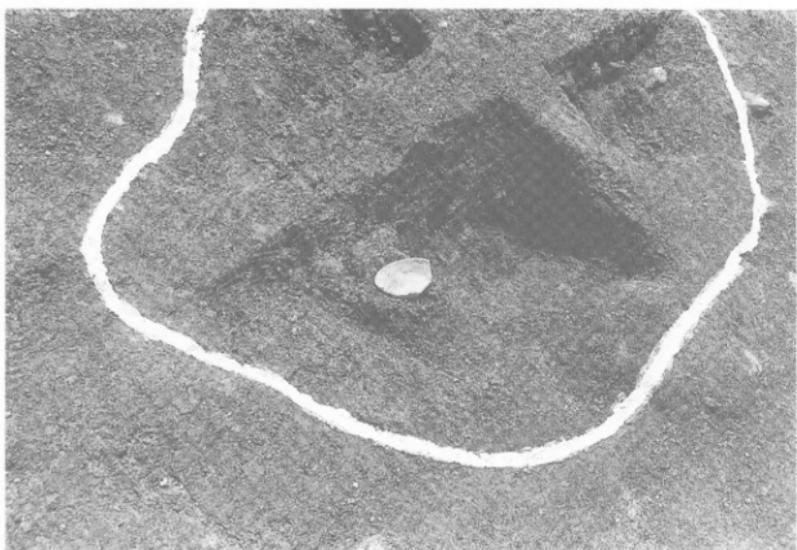


写真29 SK 02遺物出土状況（西から）

ふりがな	しらやま 3 いせき							
書名	白山 3 遺跡							
副書名	香川厚生年金健康福祉センター建設用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	2001. 3							
編集者名	三木町教育委員会 社会教育課 主任主事 石井健一							
編集機関	三木町教育委員会							
所在地	〒761-0692 香川県木田郡三木町大字氷上310番地 TEL087-891-3314							
発行年月日	2001年3月							
頁数	例言・目次等		本文		写真図版		総頁	
	4 頁	24 頁	14 頁	42				
ふりがな	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村	遺跡					
白山 3 遺跡	三木町下高岡980-1 他	37341	34度 15分 55秒	134度 9分 5秒	1994.04.12 1994.07.17	8,000	香川厚生年金健康福祉センター建設用地造成に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
白山 3 遺跡	集落	弥生時代 中世	竪穴住居跡、ピット 土壙墓 など 配石土壙 箱式石棺 土坑	弥生土器 石錫 サヌカイト片 土師器			土壙墓群	

香川県生年金施設整備センター建設用地造成
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

白山3遺跡

平成12年3月発行

監修・発行 三木町教育委員会
香川県木田郡三木町水上310番地
電話 (087) 891-3314

印 刷 株式会社 中央印刷所